

教室をカフェに！

空間作りで創発されるアイデアと教室活動の可能性

Change a Classroom into a “Cafe”!

A Possible Classroom Innovation Inspired by the “World Cafe” Approach

矢内（橋本） 弘美¹

Hiromi Hashimoto-Yauchi²

要 旨

国際文化学部国際コミュニケーション学科の主専攻科目「異文化間コミュニケーション論」において、「ワールド・カフェ」という方法を用いた。ワールド・カフェとは、「知識や知恵は、機能的な会議室の中で生まれるのではなく、人々がオープンに会話を行い、自由にネットワークを築くことのできる『カフェ』のような空間でこそ創発される」という考え方に基づいた話し合いの手法である。本稿は、教育現場でのワールド・カフェの実践報告とその可能性を論じる。

キーワード：ワールド・カフェ，教室活動，コミュニケーション，実践報告

Keywords: World Cafe, Classroom Activities, Communication, Practice Report

1. はじめに

筆者は、国際文化学部国際コミュニケーション学科の主専攻科目「異文化間コミュニケーション論」という授業を担当している。クラスには学部学科を越えた約 60～70 名が参加し、入学した 1 年生から就職活動を控えた 4 年生までが学んでいる。本授業では、「相手に伝わる明確なコミュニケーション」というテーマを掲げ、授業内でのロールプレイや、ペアワーク、グループワーク、ディスカッションを通して実際に活動し、それぞれの体験を振り返って共有をしてもらい、次につなげるという体験重視の内容で構成している。

この授業を行っていく中で、課題となっていることがあった。それは、グループワーク・ペアワークを行うとき、数名の学生はいつも固定のグループで一緒になってしまうこと、そのため、どうしても馴れ合いになり、アイデアを出しや意見交換が活発に行われないこと、である。

「コミュニケーション」というタイトルが講義名につく以上、授業設計当初から、学生同士があるテーマについて積極的にコミュニケーションができる場にしようと考えていた。学年も学科も違うメンバーで構成されていることも、いろいろな考えや価値観に触れる機会にもなる

¹ 東海大学国際文化学部国際コミュニケーション学科，005-8601 札幌市南区南沢 5 条 1 丁目 1-1

² Department of International Communications, School of International Cultural Relation, Tokai University, 5-1-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan

ため、好都合である。毎回グループワーク・ペアワークを考えていたので、隣に座った人は「今日のパートナー」と名づけ、その人との学びを深めてほしいという考えがあった。

大抵、学生は仲が良いもの同士や部活仲間と横や縦に並び、グループでまとまって座っていることが多い。それではいつも同じメンバーとのペアワークになってしまうので、それを避けるため、授業が始まってから5回目くらいまではアイスブレイクも兼ねて、ゲーム感覚でクジ引きをして席を決めたり、誕生日順に座ってみたりするなどの工夫をした。しかし6回目以降から、パートナー決めも学生の意志に任せよう、それもコミュニケーションの練習になると思いい、「まだペアになっていない人と一緒に座ってみよう」と呼びかけたが、自ら動くものと、そうでないもの（つまりいつもの仲よしグループで座ってしまうもの）が出てきた。その割合は大きくちょうど半分くらいである。

自ら動いてペアを見つけていく学生のコメントには、「今日は、はじめて一緒になった先輩と話した。自分の話を笑顔で聞いてくれて嬉しかった（1年男子）」「今日はじめてMさんと話しをした。同じ授業はいくつかあるのに、話したことがなかったので、今日一緒にペアワークができて家族のことや好きなこと、Mさんについていっぱい知ることができた。とてもうれしかった（1年女子）」のように、90分という限られた時間内でも新しい人と出会い、授業を通して相手を知ろうとする姿勢や関わりを持とうとしていることが伺えた。

一方、「今日、自分から（初めて話す人のところに）行こうと思ったけれど、やっぱり恥ずかしかった（1年女子）」「先生が、新しいパートナーと出会えようと言ったけれど、結局友だちと一緒に座った（1年女子）」「今日も同じ部活の人と座った。次こそは積極的に動く！（2年男子）」というように、頭では分かっているが出来ないという気持ちが綴られているものが幾つか見られた。

このように、授業も中間に差し掛かったころからは、このクラスの活動を理解し積極的に動きペアワークのパートナーを見つけていく学生と、仲よしグループで座っていつも同じ相手とのペアワークをする学生とに、クラスが分かれてきた。そうすると、私語が目立つようになり、ペアワークをしても馴れ合いで、緊張感や深まりがないように思われた。「相手に伝わる明確なコミュニケーション」で掲げたテーマを掘り下げ、深めていくためにも、あるテーマに基づいて、学生全員が自らの想いを語り、それが教室全体で行われるような意見交換をすることが必要である。かつ、学生の意思や自主性に任せた方法で出来ないだろうか。このような問題意識を持っていた。

2. ワールド・カフェとは

以上のような課題を抱えていたときに、偶然「ワールド・カフェ」という話し合いの手法があることを知った。ワールド・カフェとは、コーヒーブレイクの時間がもたらす「カフェ」のようなリラックスした雰囲気の中でその特徴や機能を生かし、4~5人の少人数による会話を、メンバーの組み合わせを変えながら行うことにより、集合知を生み出すことができる話し合いの手法³である。

³ 香取（2009）は、カフェには他の場との違いとして、

- ・ 人間関係が対等である
- ・ 職場や家庭では出会えない人に出会える
- ・ 自由参加である

ワールド・カフェは、1995年にアニータ・ブラウン氏とディビッド・アイザックス氏によって始められたと言われているが、その方法は、「考案された」というより「発見された」(香取2009, p.38)と言ってもいいくらい堅苦しくなく、その場に適応したホスピタリティの精神と創造性がこのスタイルを生んだのだろう。まさに、「カフェ」のようなリラックスした空間で生まれるアイデアが凝縮されたのだと言えよう。

海外でのワールド・カフェの普及はめざましく、学会や研究会の場、ビジネスの世界においても、ごく普通に行われるようになってきている。「地域コミュニティの活動、企業での戦略立案、ビジョン構成、課題解決を含むビジネス活動」(同 p.18)の中でも用いられるようになってきているが、日本でのワールド・カフェの普及は他のアジア諸国と比べるとまだまだだと言うことだ。しかし、今後はこの話し合いがもたらす可能性の広がりにより、よく用いられるようになるのではないかと考える。

ワールド・カフェの前提となる基本的な考え方として、香取(2009)は次の6つを挙げている。

- ① 人々により会話がウェブ状につながり合うことにより未来が創造される
- ② 魅力的な問い(大切な問い)が集合的学習を促進する
- ③ 人間や組織、家族、コミュニティは生命システムである
- ④ 生命体システムの基本はネットワークである
- ⑤ システムが多様性に富み、創造的な方法で結合されることにより知性(インテリジェンス)が生まれる
- ⑥ 我々は必要とする知恵や資源を集合的に所有している

このように、ワールド・カフェの基本理念にあるものは、一つのアイデアが、複数につながり合い重なり合うことで、創造的な無限のアイデアに広がっていくということである。それはとりもなおさず、一つのアイデア、つまり一つの「つぶやき」の中にも無限の可能性を見出すことであり、「つぶやき」を排除するのではなく、キャッチし、それをつなげて、そこから何か生まれることを楽しむという在り方そのものであり、それは相手を尊重することにつながっていくのではないだろうか。そうであるなら、誰もが安心してリラックスして思いや「つぶやき」が言えるような、そんな場を作ることは、一人ひとりの個性を大切にすることともつながると言えるだろう。ワールド・カフェのプロセスは、「人は会話する生き物である」(同 p.42)という信念に基づいて設計されているというが、まさにその何気ない会話が、人とのつながりや創造性を生み出していく種になるのだろう。

アニータ・ブラウンとディビッド・アイザックスは、「大切な会話をホストするための7つの原理」を挙げているが、それは、香取が言うように「ワールド・カフェを成功させるための7つのポイント」(同 p.51)と考えることができよう。それぞれの原理は以下のようになっている。

-
- ・ 参加者が主役である
 - ・ 言いたいことが言える(ふと思ったことでも言える)
 - ・ オープンである(開放性)
 - ・ 知識や価値が創造される
- とその特徴や機能を挙げている。

- 原理 1 コンテキストを設定する
- 原理 2 もてなしの空間を創造する
- 原理 3 大切な問いを探求する
- 原理 4 全員の貢献を促す
- 原理 5 多様な視点をつなげる
- 原理 6 洞察に耳を澄ます
- 原理 7 集合的発見を収穫し共有する

この、カフェのような雰囲気を大切に、学生が自由に意見交換できるきっかけとしてふさわしいのではないかと考え、ワールド・カフェの方法を取り入れることにした。

3. 実施内容

3-1. テーマについて

ワールド・カフェの原理3「大切な問いを探求する」とあるように、どのような問いで行うのかは非常に重要である。本授業では、3回のレポート提出を学生に課していたのだが、最後のレポートのテーマを、そのままワールド・カフェの「大切な問いを探求する」とすることにした。そのテーマとは、『華とは何か。相手の華・自分の華を咲かせるためには、何が必要か⁴』である。他者とのコミュニケーションにおいて、「あの人は華がある」という言い方をすることがある。そのとき「華」という言葉に込められた思いは、その人そのものが持つ魅力であったり、輝きであったり、個性であったりするのだろうが、では自分の「華」とは何か、華を咲かせるためには何が必要か、ということを考えてもらうことを意図した。

一学期間15回うちの13回目の授業は、12月最後の授業であり、そのときに冬休み中(約4週間)に考えて書いてくるようにと上記のテーマでレポート課題を出した。次回の授業時(年明けの14回目)にレポートを提出することに呼びかけ、この日の授業時にワールド・カフェを行った。つまり、学生にとっては冬休みを使って、各々が自分の考える『華とは何か』のテーマで考えをまとめて書いてきてもらい、その提出の日にワールド・カフェを行ったという運びである。ある程度、自分で考える時間があり、自分の考えがまとまっているときに始めるのが適切かと思い、この日に実施することとした。

3-2. 準備/用意したもの

まず、教室の設営を行った。3人がけの長机を2つ合わせ、6人で囲めるような配置にしお互いの顔が見えるようにした。このような「島」を15テーブル作った。(以下、この島のことをテーブルと呼ぶ。) テーブルには、『模造紙』と『クレヨン』を置く。参加者が自由にいたずら書きをしながら会話をすることで、さらなるつながりを生む創造的道具ということだったの

⁴ このテーマを選んだ理由はいくつかあるが、もっとも大きな理由としては、授業で取り上げたテーマの一連の流れを形づくりたかったからである。7回目の授業では「自分の強みに気づく」、8回目の授業では「夢に勇気を持つ」、9回目の授業では「目標設定」であり、11回目の授業でそれを表せるように「表現力を高める」というテーマで授業を行ってきており、学生は夢やビジョンを語ってきた。そして、その集大成として、自分の中に眠る種に気づき、その華を咲かせて欲しいという願いも込めてこの、『華とは何か。相手の華・自分の華を咲かせるためには、何が必要か』のテーマを選んだ。

で、経費を考え模造紙の代わりに大きなポスターやカレンダーを張り合わせ、その裏を使うことにした。この大きな紙は、6人テーブルのちょうどテーブルクロスのようになった。そして、24色のクレヨンを各テーブルにセットした。

黒板には、大きな字で『ようこそ！コミュニケーション・カフェへ！』と書き、その下に本日のテーマである『華とは何か。相手の華・自分の華を咲かせるためには、何が必要か』と書いた。また教壇には、活けた黄色やオレンジの花を飾り、いつもと違う演出を心がけた。時間になり、学生が教室に集まってきた。普段見慣れた教室のレイアウトがまったく違っているのに学生は驚き、「え～！ 何なに？」という声や「カフェだって！」という声が聞え、各々好きなテーブルにつき、盛り上がりを見せていた。

3-3. 授業の流れ

時間になると、全体を見回し人数調整をして4人から6人になるように席についてももらった。まずワールド・カフェとは何かの説明を行い、今日やることを伝えた後、「ワールド・カフェの標準的なプロセス」(香取 2009)を抜粋したプリントに沿って、全体的な流れを見てもらった。まとめると以下のようなになる。

① 第一ラウンド 20～30分 (テーマについて探求する時間)

ここでは各テーブルでテーマについて話し合う。テーブルの上の紙に自由にいたずら書きをしながら会話をする。

② 第二ラウンド 20～30分 (アイデアを他花受粉する)

各テーブルに一人だけ「テーブル・ホスト」を残し、学生は「旅人」となって、自由に他のテーブルに移動する。移動先のテーブルでは、テーブル・ホストが出迎えて自己紹介などを行った後、テーブル・ホストが第一ラウンドでどのようなアイデアが話し合われたのかを「旅人」である学生に説明する。説明を聞いた学生は、自分が元いたテーブルで話し合われたことを紹介し、紙の上に新しいアイデアやさらなるつながりを表現したりする。

③ 第三ラウンド 20～30分 (気づきや発見を統合する)

「旅人」の学生が再び元いたテーブルに戻り、旅先で得たアイデアを持ち帰って、メンバーと話を続ける。

④ 全体セッション (集合的な発見を収穫し、共有する)

第三ラウンドを終えると、カフェ・ホスト⁵(この場合は全体を見回している教師)がファシリテーターとなって、参加者全員で対話を行い、それまでに得られたアイデアの共有を行う。

この全体の流れを説明した後、「カフェ・エチケット」についても触れた。このワールド・カフェは、単なる雑談やお喋りの時間ではないので、テーマに基づいて意識を集中すること、積極的に話しをすること、相手の話に耳を傾けること、アイデアをつなぎ合わせてみることを、

⁵ カフェ・ホストは、時間の管理や全体を見渡す役目であり、ここでは教員である筆者である。テーブル・ホストは、各テーブルから1名ずつ選んでもらい、そのテーブルに残り、第二ラウンドで移動する学生を迎え入れる役割である。各テーブルの話題が活性化するように話しを振ったりする役目でもある。

とにかくコミュニケーションを楽しむこと等である。それらを全員で確認した後、第一ラウンドへ入っていった。



図1 教室全体のワールド・カフェの様子



図2 クレヨンで書き込むことでつながりが出てくる

3-4. 授業の様子

第一ラウンドから、それぞれのテーブルでかなり盛り上がりを見せていた。最初の20分になると、カフェ・ホスト（筆者）は手を上げて時間を知らせ、各テーブルのテーブル・ホストを残し、移動時間とした。このときのなるべく同じテーブルだった人と離れてもらうように指示し、バラバラになってもらった。

第二ラウンドでは、また新しいテーブルで自己紹介をしてもらいながら、テーブル・ホストはそれまでのこのテーブルの話し合いの流れを、移動してきた学生はそれぞれの場所でのことを話し、アイデアを練っていた。

第三ラウンドでは、また元の場所に戻り、それぞれのテーブルで話し合われたことのシェアをした。テーブル・ホストは、「おかえり」と言いながら、楽しそうに話しをしていた。第一ラウンドでは途中になっていた絵が、第二ラウンドで誰かがそれに描き加えてくれたらしく、そんな紙の上でのコミュニケーションも楽しんでいるように見受けられた。

全体セッションでは、香取（2009）によると、マインドマップやファシリテーショングラフィックス、ポストイットで全体をまとめ共有するやり方が紹介されているが、本授業ではそこまでの時間が足りなかったため、全員に立ってもらい、他のテーブルでどのような話し合いが行われたか、その足跡（紙）だけでも見ってもらう時間を5分ほど取った。そして、各自振り返りシート⁶に記入してもらい、終了した。

⁶ 振り返りシートでは、3つのことを聞いた。

- 1) テーマについて、グループの話し合いで得たひらめきや発見、感想などを振り返って書きましょう
- 2) 3ラウンドごとにどのような話し合いの流れがありましたか
- 3) このワールド・カフェで、あなたが学んだこと、感じたこと、気づいたこと等自由に書いてください、の3つである。

3-5. 学生の感想

授業が終わってからもワールド・カフェの熱気はあり、学生数人は教室を出ることなく、そのまま残ってまだ話を続けていたので、それぞれの絵について説明⁷をしてもらった。以下は、図3を書いた学生たちの話である。A・Bはそれぞれ1年男子学生である。

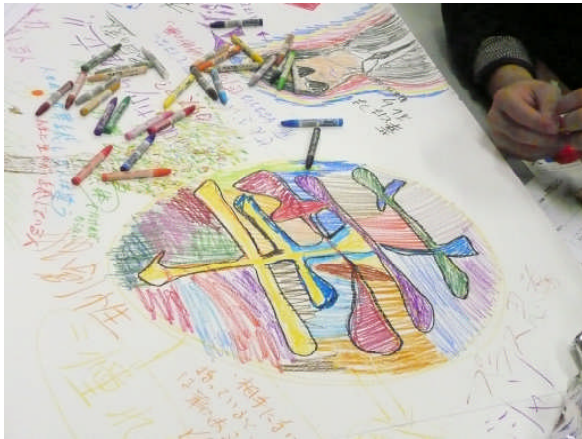


図3 あるグループの「華」



図4 第二ラウンドで、テーブルの話し合いを説明する「テーブル・ホスト」

- A: この「華」っていうのは、この色がいろんな経験とか出会いとか。自分の大切な人生の中で培ってきた、その「栄養」みたいなもので、そんなのが集まっていくと「華」ができるんじゃないかなという表現。
- B: 生まれたときは多分白紙なんですよ。そこにどんなものを残すか。多分残さない人もいますんですよ。で、なんか薄いじゃないですけど、その「華と言われるものがない」。結局はその自分の経験というものをどういうふうに残していくかということで華っていうのは結果的に残るんじゃないかな。
- A: 多分、日常の何気ないことでも、多分感性の鋭い人だったら、華のある人だったら、多分何かを感じているんだと思うんですよ。だから、今までの長い人生の中で、どれだけのものを拾えるかっていうのが、やっぱり、華っていうのがどんどん出来ていくと思うんですよ。で、こうやって空いたスペースを埋めていったら、気づいたら自分は、華があると言われるように、言われる頃になるんじゃないのかなーと。
- B: 最初に俺、「華かこう」って言ったらこういう意味じゃなかったんだ。
- A: 思いつきで、じゃあ塗ってみようぜってなって、で何か書いてみようぜってなって、そしてたらなんか、いんじゃないね?! みたいな。偶然から生まれた偶然の産物。いやあミラクル達成!

この後、Aは、「俺、今言ったことと、レポートに書いていたのと、随分違うんですけど、今だったら、もっと違うこと書くかも…」と話し、このワールド・カフェの話し合いからいろいろアイデアを得たことを伝えてくれた。上の会話の下線部分を見ても、紙に書く／描く、色を塗るという行為を通して、更なるアイデアや気づきに至ったことが伺える。

⁷ レコーダーに録音し、声を文字におこしたものである。

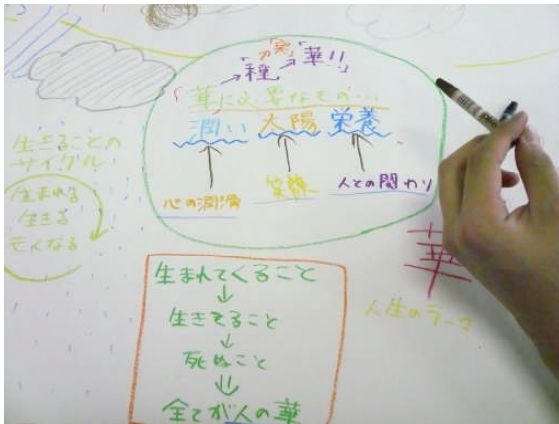


図5 アイディアを書き出す



図6 そのアイデアが他のテーブルにも！

図5の「華に必要なもの」に、潤い（心の潤滑油）、太陽（笑顔）、栄養（人との関わり）と書かれているが、これが第三ラウンドで学生が移動、アイデアの交換をすることで、第三ラウンドでは別のテーブルにそのアイデアが書かれて（図6）、そのテーブルで共有されている。まさに「旅人」のお土産のように。

この図5を書いた学生C（1年男子）の発言は以下の通りである。

C: 華なんて無い、と。で、華が無いってと言うのは、本当に無いわけじゃなくて、華っていうものこれだ！っていうものが無い。人それぞれで。例えば俺だったら一番好きなダンサー。Dちゃんだったら一番好きなバスケットプレイヤーを、それぞれ思い描くわけじゃないですか。だから、決まった華なんてないけれど、誰でも目標とするもの、到達したい地点を持っている。そこが華なんじゃないかな、と。そこから、この「華・実・種」の話になって、まず華を見ると。で、種は「こうになりたい」と。またそこで努力をして実をつける、と。ここに来た自分を誰かが見て、「ああ、ここになりたい」って。で、そういうふう在世の中って、夢で回っているんじゃないかなって。意外に意味なさそうな絵なんですけど、あるんですよ。

それで、これが俺達が考える華に必要なもの。まず、華に水が必要じゃないですか、「潤い」って。心の潤滑、ゆとり。いつも張り詰めない。ここに行かなくちゃいけないじゃなくて、行きたい。MustじゃなくてWantっていう。次に「笑顔」。やっぱり楽しむことが重要だと思うんですよ。努力も必要なんですけど、結果的にやっぱり楽しんでいかないとやっぱりやりたいものにはなれないんじゃないかな、と。後は「人との関わり」ですね。どんな天才でも自分の頭の中だけで考えることってたかが知れているじゃないですか。人のいいところをちゃんと取り入れて、ちゃんと自分の考えを広げていく。この3つが華になるために必要じゃないかなって、俺達は考えました。落書きを書いているようで、でもそうじゃなくて。

4. 結果

このように、学生達はワールド・カフェという話し合いの手法を通して、テーマについてそれぞれの考えを深めていたことが分かる。振り返りシートのコメントでも、それは読み取れることができた。

- ・ 少人数で話すことで意見をたくさん出せた。集合知はすごい効果を出すと感じた。（4年男子）

- ・ 他のグループに行った時に、華から連想するつながるものをグラフで描いていて、なるほどなあと思った。努力から生まれるという言葉が心に残った。(2年女子)
- ・ 皆のアイデアを集めればたくさんのアイデアが出ることに改めて実感した。(1年女子)
- ・ 誰かは同じ意見の人がいるだろうと思ったが、それぞれが自分の考えを持っていて、みんな一つ一つ華の種を持っているのだなあと思った。(1年女子)

5. 考察

ワールド・カフェのことを本で知り、ヒントを得て、実際の授業で行ってみたが、思った以上の効果と手ごたえがあった。学生のイキイキした楽しそうな表情、各テーブルから盛り上がる「ああ、そっか!」「そうするとさ…」「ねえ、これってこうじゃない?」という声、笑い声、リラックスした雰囲気、教室全体に広がる安心感。アイデアはこのように生み出され、形になり、外に出るのだということを目撃して、聞いて、感じる時間であった。

今回は、『華とは何か。相手の華・自分の華を咲かせるためには、何が必要か』というテーマで、まず学生にレポートを書いてもらってからの話し合いであった。そのため、事前に自分の考えをある程度まとめてもらってからの話し合いという流れになったが、それだけではなく、むしろアイデアを練る始めの段階にレポートの方向性について考えを深めるという意味でも、このような時間が必要なかもしれない。そうであるなら、ワールド・カフェを行ってブレインストーミングを行い、そのアイデアを持ってレポートを書き、そしてまたワールド・カフェで意見交換をする、という順番でもより考えは深まっていくのではないかと考えた。

また、ワールド・カフェのような話し合いの場は、授業の始めやモチベーションを上げることにも有効だろうと思う。学生同士を見ていると、安心して安全な場が用意されていれば、皆よく意見を言い、人の話を聞き、とても活発であることが分かった。教師は、このような「場」を作るファシリテーター⁸として存在すればいいのだということにも改めて気づかせられた。

6. 今後に向けて

今回は、時間の都合もあり、全体セッションで深めていくことまで回らなかったが、今後は、それも含めた教室作りを考えていきたい。そして、場作りという観点から、コミュニケーションが巻き起こるための教師の働きかけを研究していきたい。

参考文献

- 香取一昭, 大川恒 (2009), 『ワールド・カフェをやろう!』, 日本経済新聞出版社
中野民夫 (2001), 『ワークショップ』 (岩波新書), 岩波書店
中野民夫 (2003), 『ファシリテーション革命』, 岩波書店

(受付: 2010年1月29日, 受理: 2010年2月20日)

⁸ 本稿に関連した教師のあり方については、全体として参考文献に上げられたものが有用である。